



10月15日(土)  
2022年(令和4年)

発行所:東京都千代田区一ツ橋1-1-1  
〒100-8051 電話(03)3212-0321

毎日新聞東京本社



# 可能性広がる高層都市

三菱地所と毎日新聞社による「#地球塾2050」が10月15日、東京都千代田区大手町2の常盤橋タワーで開かれました。首都圏の小中学生19人が参加し、私たちは「3D化する都市」について考えました。

## 生活のライフライン

今回の「#地球塾2050」では、TOKYO TORCHを具体例に、2050年には当たり前になっているかもしれない僕達の暮らしを学ばせていただきました。

2050年には、昔から考えられていたけど、想像の域を出ていなかったものが実現されるかもしれないと感じました。その中でも僕は都市の3D化にすごくひかれました。3D化は夢のある計画だと思います。けれど、自分自身が少しでも高所恐怖症というのもあって安全性が気になります。僕はそれに「災害」と「ライフライン」という要素を掛け合わせて考えてみました。



災害に遭った時、高層ビルの最上階だと、エレベーターが止まって1週間以上いる羽目になるニュースを見て、高層階ほど危なくなるのではないかと考えました。だから、空中生活をする災害時のライフラインの確保に困ると考えました。

水については、「地球・自然と共生する都市」を話し合うグループの意見にあった、雲を集めて水を作るというアイデアが最良の考えだと思いました。電気は、各部屋で窓ガラス発電を行うなど、新たなクリーン発電を行うなどして、地球に極限まで優しくできると考えました。下水道の施設は地上で作るのではなく、空中都市に作る方が雲発電をしやすいと考えました。

空中都市のライフラインをつくるには、長い時間と莫大なエネルギーが必要というのが良く分かりました。それでも生活の基礎であるライフラインはじっくりと作った方が良いと思いました。

(黒坂建裕)

## 大樹に住む

天と地。私は10月15日に三菱地所・毎日新聞が開催した「#地球塾2050」という企画に参加し、空と自然について深く考えさせられました。一見真逆のように見える二つを組み合わせることで、世界を発展させるというアイデアは、未来を担う私たちにとって重要であると学びました。



人類は空にアコガれた。

空というのは不思議で、見ているだけで笑みがこぼれまします。映画やアニメでも浮遊する能力や建物は多くの興味を集める題材です。そんな2Dの世界でのみ起きていたことが、3Dとして実現するという話を聞いた時、驚きと興奮で私は思わず目を見開きました。

話は変わりますが、自然というのは日本だけではなく、世界が抱える問題です。森は焼かれ、木は資源として大量に消費。アマゾンの熱帯雨林が消えかかっていることは、さすがに失望を隠せませ

ん。「木を植えればいいじゃないか」。そう考える人は多いです。では、あなたの町にコンクリートのない道はありますか？ 草木がのびのびと育つ場所がありますか？ 答えは「No」です。ましてや日本の中心、東京駅の周りにそんな土地はあるはずがないです。ビルが地上にそびえ立つからこそ、自然はのけ者にされています。だから、私は空と自然を活用する案を考えました。大樹の上に家を建てればいいではないですか。人間の先祖であるサルは、木の上で生活してきました。もう一度、私たちの原点に立ち返ってみましょう。

例えば、木に住むことで、地上に空間が生まれる。そこに森をつくる。木を植えて、花を植えて、田畑を耕す。膨大な土地に自然が生まれ、資源が生まれ、生命が生まれていく。地球に緑が戻ってくる。昨今は、地球温暖化による海面上昇の問題も見逃ごせません。しかし、木の上に住むことで、何十年後、何百年後に東京が沈むことになっても命を救うことができそうです。

さまざまな観点から見ても、「大樹に住む」というのは多くの魅力を持っています。私はこの企画によって世界について考えさせられました。学ぶことも多かった地球塾に参加できて良かったと考えています。

(島森柚杏)



切りが無く、果てしない議論

正直な話、自分は空に住むなんて不可能で、住みたくないと思っっていました。しかし、今回の講座で「空中に住むといっても、さまざまな考え方があるのだな」と思いました。自分でも深く考えることができ、自分の考えを改める良い経験になったと思います。

今では多くの高層ビルが立ち並び、大都市として栄える丸の内も、昔は何もなかったというのは当たり前なのだが、どこか驚いています。誰が、どのようにして、そんなジャングルを今の鉄筋ジャングルにしたのかと考え始めたら切りが無いです。

前置きはこのくらいにして、本題の空中都市についてです。空中都市の定義として、今回は地上に降りずとも、空中にライフラインがそろっている状態とします。まず、自分の意見としては、空中にライフラインを整備して、人が住めるくらいにまでにしたいと思っています。将来的に水面が上昇したりして地上だけではカバーできない



いところも出てくるだろう

と、個人的に考えています。だから、自分は住む・住まないの話ではなく、住まないといけない時代が来ると思っています。どうアプローチしたら実現可能か、答えは一つ。皆の気持ちを動かすような案を出すことです。具体的には、空をブランド化して、空に住むことを憧れの一つにするということだと思います。技術力はいくらでもカバーできるでしょう。ならば、実現できないのはなぜか。やろうとしていないからです。もちろん地上を捨てるというわけではなく、地上を何の理由もなく使わなくするというのはおかしいことだと思います。

空と地上、どのようにつながるか、空はツールにするか主に役にするのか。これからも続く果てしない議論な気がします。(和佐一樹)

空中で働きたい

高層ビルや空中都市で、好きなイラストが描けたら素敵だなと思いました。

私がこのように思った理由は、TOKYO TORCH

の常盤橋タワーを見学する機会があり、その際に自分で選べるワークスタイルについてお話をうかがうことができたからです。



私は将来、イラストレーターになりたいです。このような創造力を必要とする職種の人、高層都市について学ん

だことで、より気軽に空中で働くという選択肢を選ぶことができる世の中にしたいたいなと考えました。なぜなら、空中で働くことにより、とても広い景色を眺められるためインスピレーションがわくし、とても快適なワークスタイルになると思ったからです。それにより生産性が高まること、証明されたら、より気軽に沢山の人が空中で働くことができるようになると思います。このような世の中を作ることに、TOKYO TORCHなどの高層都市プロジェクトが貢献していってくれたらうれしいです。

(新田愛花)

空飛ぶ車、何のため?

「#地球塾2050」が10月15日に常盤橋タワーで開かれました。三菱地所執

行役員の茅野静仁さんが2027年度に完成するTorch Towerについて講演し、常盤橋タワーからその工事現場の見学会も行われました。

茅野さんが話していた都市の3D化について、私は空の移動や災害のシミュレーションについて関心を持ちました。茅野さんはTorch Towerの屋上や途中の階に空飛ぶ車の発着場など作りたいと話していました。

では、なぜ空飛ぶ車について話したのでしょうか? 私が考えたのは、素早く移動することが可能になるから。それによって病気の人も素早く病院などに移動させることができるから。そして、それを実現していくためにはどんな



ことをすればよいのでしょうか?

私が考えたのは、さまざまな地方自治体との連携はもちろん、その地域の人たちの理解を得ること。そのためには、返礼品や商品券を用意するなど、どちらにもメリットが有るような提案をすることが大切だと思います。

(赤井亮太)